

2017年 中学校の部 最優秀賞

「8時15分 ヒロシマで生きぬいて許す心」を読んで

岩手県盛岡市 盛岡市立城東中学校3年生

佐々木 快人（ささきかいと）

衝撃だ。頭を殴られた。脳が震え、視界が歪んで正常に立てていない。戦争の情報は色々な所から入手していた。身近でいうと、教科書だろう。教科書には、8月6日に広島に原子爆弾が投下され、二十万人以上の被害者を出した、としか記載されていない。だから、その事実を楽観視していた。しかし、この本を読んでそれができなくなった。感情が記されない教科書を全てだと思っていたら、不意打ちみたく感情が流れ、その日の恐ろしさを改めて感じる。生々しく書かれた文章のページをめくる度、痛々しさや悲惨さを感じ、何度も心をえぐられた。その日の苦悩や思いを見ていると、頭を殴られたように錯覚した。

突然だ。突然落ちてきた一つの爆弾によって、町は地獄とかし、人々はこわれた。心身ともに、原爆という悪魔に蝕まれたのだ。家、家族を失い、彼らは何を思い、考えたのか。痛みを知らない僕には、想像が出来ても有り得ないと直感してしまう。ただ一つ、憎しみは大きいと思う。戦時中で物が無く、生活も苦しく、危機にせまると、ひそかに愚痴をもらすほど国民は限界に達していたのに、いきなり家族や大切な人をなくすのは、爆発してしまうだろう。特に、進示さんや福一さんは兵士に、負の感情を持っただろう。あの兵士は、人の情が欠けていると思う。百歩譲って規律を重んじなければならなく、通すことができないとしよう。しかし、福一さんへの悪口は認められない。文中にもあったが、戦争は人を狂わせるのだなと思った。武力を持っているが、他国と戦うだけでなく、国も守ることに使えないのか、と思った。個人的に怒りが積もる場面だった。対戦国と兵士に憎しみを強く彼らは持ったはずだ。しかし、福一さんの言葉は憎しみを緩和させた。進示さんが痛みを訴えるなか、励まし、一緒に下ったのだ。自分も傷つき、今にも倒れそうなほど弱っていたのだ。凄い人だ。彼に進示さんは救われたのだろう、もし、彼の言動が無ければ、進示さんは生きることを諦めていただろう。素晴らしい父親だ。文中、福一さんは、「唯一、お前に言うてやれることは、ただ志を強く持ち続けて、何があっても生き続けろということじゃ。」

と、おっしゃっている。まるで遺言のように聞こえる言葉は進示さんの心の支えになったに違いない。人は、危機的状況に置かれた時、誰かに、大丈夫だとか、生きろ、と言われると幾分か勇気が出ると何かの小説で読んだことがある。これにならい、進示さんは、生き続けた。大人になって、平和のためならと尽力した。父親は凄いと改めて思う。あらゆる面で、方向を教えてくれる。

また、友達にも沢山助けられていた。治療できる所に移動させてもらったり、食料を分

けてくれたりと色々だ。中には、人生を左右した仕事をくれた友達もいた。良い友達に進示さんは囲まれていた。そして、奥さんとなる美代子さんとの出会いと暮らし。美代子さんは、有能であると思う。彼女の仕事ぶりを見ると妥当だろう。しっかり進示さんを支えていた。最高の母だろう。色々な面で、支えてくれる。

進示さんは、父から始まり、美代子さんまで、沢山の人たちに助けられていた。それが憎しみを無くしたのだろう。憎しみを持ったとしても、何も出来ない。むしろ、沢山の人々に出会い良い結果が出た。文中に、「何かをなくしたときは、何かを得るときだ。」とある。その通りだと思う。彼は家も、家族も無くした。でもその代わり、大切な人が沢山出来た。支えあって生きて日々は忘れられなく脳に染み付くだろう。

戦争は何を僕らにもたらすか。それは、憎しみだろう。憎しみが重なり、また戦争をすれば、終わることがない。過去を見て判断するのは軽率だろう。それでは狭い視野になってしまう。重要なのは、未来を考えることだと思う。憎しみを生むことは悪ではない。その憎しみを考えなしに相手にぶつけることが悪なのだ。そう考えさせてくれる一冊だった。戦争中、人々がどう思い、考えたのか知り、考えられて良かったと思う。